琉球大学学術リポジトリ

自閉症児と音及び音楽の関係について

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部音楽科
	公開日: 2011-05-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 哲雄, Nakamura, Tetsuo
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20079

自閉症児と音及び音楽の関係について

琉球大学教育学部特殊教育科
中　村　哲　雄

1．はじめに

(1)　突然の降壇

1996年6月14日から3日間に亘って、アメリカのオレゴン州で北西地域の自閉症研究大会があった。筆者は自閉症研究団体からの案内を承けて、その大会に参加する機会をえた。3日間に亘った自閉症児の最前線の研究討議は、非常に意義あるものだった。特に親たちの参加の多さと、熱心な質疑には驚かされた。

世界的な自閉症研究者の講話の中でも、特に注目を集めたのが自閉症の女性科学者、テンプル・グランジン（Dr. Temple Grandin）博士の特別講演であった。グランジン博士は自閉症者でありながら、動物行動工学の分野では世界的に有名な科学者である。現在、大統領の科学者諮問委員会の一人としても活躍しながらコロラド大学助教授の地位にある。

このように学問の分野でも活躍されている人を、自閉症者と呼称するのは間違っているのではないかと、一般的には思われるかも知れない。しかし本人自身も、幼児期から関わってきた人たちも、博士が自閉症だと公言しているので、現在も正真正銘の自閉症者であることに間違いはない。

ところで、特別ゲストとして招かれて、多くの人たちが博士の講演を聴くために参加していたにも拘わらず、講演開始から15分で中止するという、誰もが予期していないことが起こったのである。参加者は最初事態の背景が解らず、会場は騒然となった。大会役員たちも博士が降壇してしまって、唖然としていた。

(2)　バンド演奏の音

博士の回りに役員たちが駆け寄り、何か一生懸命話し合っている様子から、やっと会場内の人たちにも、その理由が判明したのは、それから暫くたってからだった。その原因はどうやら隣のホールで、卒業式後のコンパがあり、学生たちのバンド演奏の音が漏れ聴こえていたので、それが博士には耐えられないという様子だった。

それからが大変だった。役員たちはバンド演奏を中止してもらえないかどうか、交渉に走り回った。結果は中止できないということになり、会場が更に騒然となる中で、最終的に場所を急遽変更することとなった。千名余の参加者は、各自椅子を持って階下から3階まで運ばされる羽目となる。大変な騒ぎの中、結局30分遅れで講演は再開された。

この全く信じられないようなハプニングは、参加者に改めて自閉性障害の克服の困難性を強く印象づける結果となった。

学生たちの演奏は、参加者には全く問題になるような音ではなかった。しかし、それがグランジン博士には耐えられないという。参加者の誰もが、日常的には普通の状態で生活し活動していながら、僅かな音に耐えられないというこの異常性を、信じられないという顔をして囁きあった。博士の講演内容は、障害克服の為の家族や治療者、教師らとの関わりを、幼児期から振り返るというものであった。講演は大成功で、聴く者に多大の感銘を与えるものであった。しかし筆者はそれよりもあのハプニングのことが気になり、以来自閉症者と音･音楽の関係性について興味を持つようになった。

(3) 自閉症と音又は音楽

音楽と障害者の関係は、通常は問題はなく、非障害者と同じ関係にあると考えられていた。つまり、それは非障害者同様、好きな者もおれば、嫌いな者もいるという関係である。障害者だから特別な問題があるというものではない。特に自閉症に限って見ても、音楽を演奏したり、作曲をしたりする人も居れば、音楽療法という治療法も開発されているので、これまではむしろ音楽はプラスになるものと考えられていたのである。

しかし、先のグランジン博士のハプニング以来、自閉症と音又は音楽の関係を調べてみると、これが従来考えられて来たように、プラス的な関係だけではなく、いろいろと自閉症特有の問題もあるということが解り、状況は単純ではないように思われる。

自閉症と音·音楽の関係性はどうなっているのかを、本論文で明らかにしてみたい。

2．カナーの音への注目

自閉症と音の関係には、はじめて米国のカナーが1943年に自閉症について発表した時以来、その固執性及び反応の過剰性が指摘されている。カナーはかの有名な論文[1)]「情緒的交流の自閉的障害」の中で、11名の症例を報告しているが、その内、6名の子の音又は音楽との関係性に注目して記述している。6名の音又は音楽に関連した記述は、次のようになっている。

症例2　フレデリックw・、6歳、男子

彼は歩き回ったり、歌ったりしながら、大変楽しそうにしていた。しかし、彼は卵の泡立て器を恐れ、掃除機にはふるえあがった。

症例4　ポールG・、5歳、男子

「彼は電話がほしい」「紙を切る」「機械が飛んでくる」という言葉を繰り返しながら歌を唄っていた。

症例6　バージニアS・、11歳、女子

彼女はひとりでハミングする。クリスマスの聖歌を正確にハミングするのを聞いた。

症例9　チャールスN・、4歳半、男子

彼が音楽を喜び、鑑賞するのに勇気をえて、レコードかけるようにした。1歳半のとき、彼は18の交響曲を区別でき、第一楽章がはじまるとすぐに、その作曲家がわかり、「ベートベン」などといった。よく声帯模倣をしたり歌ったりした。音楽のあるときは前の列に行って歌った。

症例10　ジョンF・、2歳4カ月、男子

祈祷文、子守唄、外国語の歌を暗誦することができた。父がある曲を口笛で吹くと、ジョンはすぐに正確にその曲を「メンデルスゾーンのバイオリン協奏曲」であるとわかった。

症例11　エレーヌC・、7歳2カ月、女子

彼女は騒音や、掃除機を大変こわがり、それがしまってある押入に近づこうとさえしなかった。そして使いはじめると、手で両耳をおおってガレージへかけこんだ。雑音や妨害には悩まされる方で、一度、トイレの便器に座っていたとき、排水管のかたかたという音を聞いてから、数日間、自分の部屋の中の便器にかけることさえも、音がしないか不安げにしていて、排便しなかった。

以上の6つの症例は、カナーが自閉症児の行動特性を音又は音楽との関連性を意識して、正確に観察し聴取していたことを証明するものであり、また自閉症児とそれらとの関係性を、世に初めて明らかにした重要な記録となっている。

カナーは自閉症児らの11例を詳細に検討した結論として、孤立性、同一性への固執、常同性、反響言語性等、の特徴を挙げ、世界に初めて自閉症という疾病概念を提唱し、その確立に貢献した人として、あまりにも有名である。いうまでもなくこれらの疾病概念は、現在もそのまま診断の基準として用いられている。

ところでカナーは、自閉症児の音や音楽に対する異常又は過剰性反応について、どのように考えていたのだろうか。彼は論文の考察のところでそのことを次のように述べている。すなわち、自閉症児は、[2]「卵のかくはん器、風さえときに大きなパニックを引き起こすけれども、恐怖の対象は、音そのものでも動きそのものでもなく、彼の孤立をおびやかすこと、あるいはおびやかす恐れがあるために、不安が生ずるのである。子ども自身は、こわがっている音よりももっと大きい音を楽しそうに立てることもできれば、思いのままに物を動かすこともできるのである」と考察し、独自の説を述べている。

このカナーの自閉症児の音又は音楽に対する考え方は、最近、先に紹介したグランジン博士のような、かっては自閉症者だった人達が自己の半生記を発表するようになった現在、多少その解釈には問題があるものと考えている。それは、カナーの説には、音の属性としての感覚性を敢えて無視しているという点にある。

因みにグランジン博士の著書[3]によると、「大きな声はまるで歯を治療するときのドリル音のようで驚異に感じた」とか、「トイレの水の流し音はナイヤガラの滝のようで恐怖だった」とか、あるいは「部屋の同僚の使用するヘヤードライヤーの音は、まるでジェット機の離陸する時のように聴こえた」とあり、明らかに音を感覚的な異常音として感じていたことを証言している。さらに体育館での授業は、激しい騒音のため耐えられなかったと述べていることなどからして、カナーのいうような孤独を脅かすものとして解釈するには、無理があるように思われる。

カナーがこのような感覚面の異常性を、なぜ無視したのかについては、未だそれを論じたものを筆者は関知していない。しかし、敢えてそのことを問題にするとするならば、次のような考え方をしてみたい。カナーはおそらく自閉症の特徴を、孤立や同一性への脅迫的なこだわり、に強く求めたいがために、敢えて彼らの示す音への異常反応を、感覚的な視点から考察しなかったのではないだろうか。音が孤立や孤独を脅かすものと解釈されると、音楽を好む自閉症児の場合、どうなるのだろうかという問題も起こる。

最近は自閉症児の治療に音療法という治療法も開発されている。これは明らかに自閉症児の音への異常反応を、感覚的なものとして診断しなければ、治療ができない治療法といえる。

自閉症児は全部ではないが、かなりの比率で音への異常性があることは、その最初の事例報告以来、疑う余地がない。しかし、これまでその面の研究が疎かにされてきたのは何故だろうか。われわれは音と無縁に生活を送ることは不可能である。そういう意味で、自閉症児と音の問題は極めて重要なものだと思われる。

3．2人の自閉症者の報告

最近欧米では、高能力の自閉症者と言われる人達が、自らの半生を振り返って、それを本にして発表している。その代表的な人が先に紹介したグランジン博士であり、さらにはオーストラリア出身のドナ・ウイリアムズ氏である。両者は共に女性で、著書がベストセラーになっていて、親交を保ちながら自閉症者の社会的啓蒙活動をしている点が類似している。

先ず最初にウイリアムズ氏の報告を、氏の著書[4]から引用してみたい。

「わたしのまばたきは、音に対する反応であることも多かった。わたしには、人の声のトーンがいやでたまらないことがある。そんな時、まばたきすることだけに集中していると、人の声もあたりの物音もいつの間にか遠ざかってゆくのだ。」
「よくテレビのボリュームを上げたり下げたりして、断続的にテレビの中の人物の声を消したながら画面を見ていた。自分の耳そのものを、両手でふさいだり離したりすることもあった。」
「両親は、わたしの耳が聞こえていないのではないかと思ったことがある。二人はわたしの真後ろに立ち、交互に大きな音をたてた。わたしはまばたきするしかなかった。そこでわたしは、聴覚テストを受けさせられることになった。テストの結果、わたしの耳は聞こえていると判明した。」
「それから何年も後に、再びわたしは聴覚テストを受けた。そしてこの時は、わたしの耳は平均よりもよく聞こえているだけでなく、普通は動物にしか聞こえないような周波数の音まで、聞き取ることができるのだとわかったのである。問題は耳自体ではなく、わたしの音に対する意識が時々とぎれてしまうところにあった。」
「わたしには、ひとつだけ大好きな音があった。それは金属どうしが触れ合う可憐な音。母には不運なことに、家の呼び鈴がまさにこれだった。わたしは何年にもわたって、取り憑かれたように呼び鈴を鳴らし続けた。両親はさんざんわたしを叱った後、あきらめて呼び鈴の電池を抜いてしまった。」
「だがそれくらいで取り憑かれた気持ちはおさまらない。わたしは自分で呼び鈴のふたを取ってしまうと、中の呼び鈴自体を、なおも手で鳴らし続けたのである。」
「わたしはごく小さい頃から、チリリンと響く、硬貨の可憐な音が大好きだった。だからよく安全ピンどうしをこすり合わせていたものだ。安全ピンを見つけると、しゃぶっているか、耳元で鳴らして音を聞いているかだった。」
「金属どうしが触れ合う音も、大好きだった。だがなんと言っても一番素敵なのは、クリスタルグラスのきらめくような音と音叉の、のびやかで明るい響きの音。わたしは音叉をひとつ持っていて、何年もの間、いつも大切に持ち歩いていた。」

以上はウイリアムズ氏の著書から、音に対してどのように感じていたのかについて、記述したものである。この報告を見る限り、カナーは、自閉症児の音の解釈では大分かけ離れているような感がする。ウイリアムズ氏の音への反応は、明らかに感覚や知覚の問題と関連したものとの見た方が、理解しやすいように思われる。
次に同じようにグランジン博士の[5]報告を見てみよう。

「わたしの耳は、あらゆる音を拾い上げるオープンマイクロホンのようなものであった。いつもマイクを開閉しながら、音に対応していた。」
「母親は自分を聾児ではないかと思っていた。聴覚検査の結果は正常だった。しかし、音の入覚の調節ができなかった。音はいつも過剰的であるか、あるいは過小的であった。」
「わたくしには、大きな音がまるで歯医者の使うドリル音のように聞こえて、耐えられなかった。」
「わたくしは、音を聞きながら手をたたいてリズムを取るのが出来なかった。みんなとそれが合わなかったので、白い目でいつも見られていた。」
「町のショッピングモールの音が耐えられず、買い物が嫌いだった。風呂場の扇風機やドライヤーの音が、悩みの種だった。教室はいつも騒音がジェット機の金属音に聞こえて、大変だった。特に高い音が嫌いで、低い音は大丈夫だった。紙袋をたたく音や花火の破裂音は耐えられなかった。中にはシャットアウト出来ない音があり、困っている。」

これらの記述は、両者が高い能力の自閉症者という点からして、その信頼性は高いといえる。これら

の事例は、多くの自閉症児に見られる症状であり、しかも音の世界に住んでいる人間にとっては、深刻な問題だといえるのだが、現在の自閉症の診断基準には、このことについては全く触れられていない。自閉症児の学校での指導は、溢れる騒音の中で、どのような配慮をしてきたのか、あるいは、どのように対処しようとしているのかが、これまでは全く問題にしてこなかっただけに、今後、それをどうするかが問われている。

4．自閉症児と聴覚

自閉症児は感覚的に障害があることは、これまでの症例報告で明らかとなった。症例報告を見る限り、自閉症者の音に対する反応は、極めて個性的であり、多様性的である。実際に自閉症児と接して見ても、千差万別の反応様式があり、一様でない感がする。それ故、音への反応異常性がある場合、その教育的対応も、当然、多様でなければ困る。しかし、個性的で多様な反応を示す自閉症児らの反応様式も、よく観察すると、そこには幾つかのパターンがある。

デラカート博士[6]は自閉症児の聴覚反応を次のように分類している。

(1) 聴覚過敏性

この分野に該当する子供達は、次のような特徴を示す。

「過敏なこどもの行動は避けるか斥けるかのどちらかである。音から逃げる、遠くへ離れられない場合は、手で耳をおおうなり指を耳の中に入れてふさぐなりするか、あるいは音を完全に拒否してしまう。」

「音によって苦痛を受けるので、離れたり耳をふさいだりしても音を止めることが出来ない場合は、脳へのスイッチを切ってしまう。こうした子供は大きな音が自分のすぐうしろでしてもびくともしない。」

「彼の行動は彼が完全に聾であるかのような印象を与える。この一時的な聾は、彼自身が音を立てる反復行動を始めるやいなや消え去る。自分で立てた音には喜んで耳を傾けるのである。」

「過敏な子供はわれわれ正常な聴覚を持った者には聞こえない多くの音を聞く。われわれなら無視してしまうような音のせいで眠れない、と言った問題が生じることもある。われわれには気づかないような、あるいは意識から排除してしまえるような音が聞こえるからである。眠りは浅く、一晩中眠れないことさえある。」

「多くの電気や機械の装置はわれわれには聞こえない高周波の音を出すが、過敏な子供にはそれが聞こえてしまう。電球、水道管、呼吸、テレビ受信機など、一見何も聞こえないような音に耳を傾けている子供達にこうしたことが見られる。」

「激しい息づかい、いびき、風による家のきしみなどもすべて、過敏な子供に恐怖を引き起こす。」

「過敏な子供達は、周囲の音から生じる苦痛や恐怖を調節することが出来ないことで、音源から逃げようとする。この避難反応は、部屋から出て行く、押入に隠れる、ふとんの下に隠れる、家から逃げ出す、などの形をとる。」

(2) 聴覚鈍感性

このカテゴリイーに入る子供達は、次のような行動をとる。

「これは大きな音を立て、大きな声を出す子供である。子供にとって世界はあまりにも静か過ぎる。外界からの音のメッセージは彼の脳まで到達しない。そこで彼はより高く、より強い音を、より多く求めるようになる。」

「騒音や大きな音が大好きで、音のする方へ近づいて行く。」

「洗濯機や皿洗い機、電気ミキサー、電気掃除機の音に耳を傾けながら数時間も座っていることがしばしばある。」

「台所や浴室にいるのを喜ぶ。この二つはもっとも騒がしいところである。便所の水を流し、騒がしい

電気製品のそばに近寄る。」
「水中音波探知機のような行動がひんぱんに観察される。つまり物や壁のまわりを歩きながら音を立て、音の反響がその位置によってどう違って聞こえるかに耳を傾ける。」
「海岸が大好きで、波の音に耳を傾けながらじっと座っている。」
「消防車や救急車やごみ収集車に強く引かれる。いろいろな種類のエンジン音に耳を傾けるのが好きである。」
「紙を引き裂くのが好きである。テイシュペーパーのような破って音のしない紙でなく、こわばった紙をばりばり音を立てて破くのが好きである。手の中で紙をしわくちゃにしたり、びんから紙をはぎ取るのが好きである。」
「人混みや交通の騒音が好きである。周囲の音が聴覚系に入って来るがままに、ぼんやり空を見つめながら座っていることがよくある。」
「とにかくこの子供達はあらゆる音がすきなのである。」

(3) 混乱性聴覚
「この子供達は自分の内部から聞こえてくる音に心を奪われているように見える。」
「走った後で静かに座って自分の心音に耳を傾けることもある。食事の後で自分の消化器系が活動しているのに耳を傾けることもある。」
「しばしば口からはあはあと大きく呼吸して、自分の呼吸に耳を傾ける。呼吸の速さを変えてみては、夢中になって耳を傾ける。」
「これといった理由もなく発作的に激しい金切り声をあげる。」
「体を前後にゆすったり止めたりして、頭の中の音の違いを聞き分けているような様子を示す。」
「椅子にぶら下がったり、頭を下げたり、首をかしげたりといった、奇妙な、重力に引っ張られていくような姿勢を取る。」
「あたかも自分に耳を傾けているようである。」
「よく鼻歌を歌う。彼らはたえず静かな音を立てて、それに聞き入っている。」

これらの分類は、デラカート博士によるものだが、自閉症児の音への反応の形態や類別がよく整理されていて、その理解に非常に役立ものとなっている。自閉症児と一口に行っても、音への反応が様々であるが、その基本的な反応パターンは、これまで示したように、大きく三つに分類できるので、子供の教育上、これらの行動特徴を理解しておくことは重要となる。

5．自閉症と音楽

自閉症児の中には、音を感覚的に拒否したり、あるいは受容したりする子がいることは、前節で述べたとおりである。それが音楽との関係となると状況が一変する。筆者の一般的な経験又は研究報告等を検討してみると、音に対して異常な反応を示す子でも、音楽が鳴ると気分を一新して、踊ったり走ったり、あるいはじっと聞き入ったりする場合が多く見られるからである。カナーが最初に報告した症例の9及び10は、その典型的なものと言えよう。幼児期にして曲名や作曲者を認知する能力は、優れた音楽的感性を示す症例報告である。そういう訳で、明らかに自閉症児らは音と音楽とを区別しているように思われる。

それでは自閉症児の音楽的能力について、自閉症研究者や自閉症者達はどのような報告をしているのか、以下でさらに詳しく見てみ。

その代表者として、まずイギリスの[7]ウイング博士の報告を見てみたい。

ウイングは自閉症児の音楽性を次のように述べている。つまり「ピッチの絶対性、音の正確な弁別と

再生、楽器の演奏、作曲に優れた能力を発揮する」と。特に驚かされるのは、音やリズムに対する正確な弁別と再生が出来ると言う点である。普通、これらの能力は訓練して身に付けるものだが、自閉症児らはこれを生来的に可能としている点に注目している。

次に、先に紹介した[8]ドナ・ウイリアムズ氏は、音に対しては激しい拒否反応を示したことを報告しているのにも拘わらず、音楽に対しては以下のように述べている。「わたしは楽器をさわるずっと以前から、いつも音楽とともに生きてきたような気がする。だれに教わることもなく、わたしは頭の中で自然に曲を作り、指でそのリズムとメロデーを刻んでいた。」と自分の過去について回想している。さらに初めてピアノに向かったときも、「すぐに頭の中にあったメロデーを叩いてみた。それからまもなく、流れるようにメロデーを弾きながら、曲を作り始めた。」ということを述べている。びっくりさせられるのは、「ピアノに向かうのは初めてでも、何の苦もなく弾くことができたのだ。」と言う点である。

ウイリアムズ氏は、既成の音楽を聴くのも好きだったと述べている。「家にいるときは、わたしは自分の部屋に閉じこもって、もっぱらレコードを聞いて過ごすようになった。プレーヤーのボリュームを最大にして、自分も声を限りに一緒に歌うという騒々しさだった。しかも同じレコードを何度も繰り返しかけるのだった。」と言っているように、音楽の演奏では全く苦にしていなかったような様子である。

最後に、長い間自閉症児の治療教育に携わってきた[9]ゲイル・ギリンハム氏は、非障害児と一緒に歌を歌っている間は何でもなかった自閉症児が、終了と同時に皆が拍手をしたら、耳を塞ぎ、外へ逃げ出そうとしたと、報告している。これは音と音楽に対する自閉症児の際だった相違を示すものだと言える。また、ギリンハム氏は、自閉症児にはソフトな音楽が落ち着きを与え、何故か知らないがクラシック音楽が好まれ、特にベートベンの第九の「歓喜の歌」が、好まれたと述べている。以上の報告事例は、量的には十分ではないが、音に対する反応の状況と、音楽に対するそれとが、明らかに違っていることを示している。自閉症児の総てが、そのような反応様式を示すと言うわけではないが、多くの子はそのような反応を示す傾向があると見ている。

6．音楽と共感性

先に紹介した自閉症児の発見者、レオ・カナーは、自閉症児は音楽に対して敏感であり、音楽的才能があるいうことを述べている。これは音刺激にたいする自閉症児の反応異常性について、先に紹介した解釈とは違った見方となっている。音に対する解釈では孤独との関係性を強調して、感覚的な解釈を避けたように思われるが、音楽に対しては、その才能を認めていたのである。

ところで、問題は何故、どのような理由で自閉症児達は、音楽には選好的な反応をしめすのだろうか、と言う点である。現在のところそれを論考した論文を関知していないが、音楽療法では、音楽が治療的な効果をもつと考えて、それを用いているので、その背景を検討すれば、理由が理解できるのではないかと考えたい。

日本における音楽療法の第一人者、[10]山松氏は音楽の特性について次ぎのように述べている。すなわち「音楽は知的抵抗がほとんどあるいはまったくなく、行動を起こすのに論理に訴える必要がないことから、言語以上に治療に役立つ」と言い、そして「言葉のない自閉症児でも、音楽によって感情の表現ができるようになる 」ことを強調している。

自閉症児達は、言語的なコミュニケーションを最も不得意としているので、音楽は知的抵抗を不要としていると同時に、それによって豊かな感情の表現が可能であるとなると、彼等はこれを音とは根本的に異なった次元のものとして、感得しているものと思われる。

音楽療法の創始者、アルトシューラーは、音楽は人間の内部の気分や律動を喚起すると同時に、人間は音楽のリズムやテンポに自己の気分や潜在的な活動性を同質化させる特性がある、と述べている。音楽は要するに、二重の意味で人間の感情と融合する特性をもっていることになるのである。

このように、音楽には人間の感情と深く連結している面が強いだけに、治療に有効であり、音楽療法という名の治療法が成立することになるのである。

音楽療法は、特に自閉症児だけに開発されたものではないが、自閉症児の治療にこれを利用する背景には、先の山松氏によると、次のような理由がある。つまり「自閉症児に接する場合、いかなる他のアプローチよりも、音楽によって迫る方が直接的であり、彼等の心琴にふれうると確信している。そのことは、音楽の嫌いな人や音楽の醍醐味を味わえない人にとっては、とうていわかってもらえないことかもしれない。そうした人達にとっては、音楽は、きわめて微力の存在としか思えないかも知れない。音楽的行為とは、抽象的な概念ではなくて、全身的な反応であり、詩心であり、行動そのものである。」からだという。彼によれば、自閉症児らはこのことを教えられなくても関知しているのだという。

自閉症児らが音を拒否し、音楽を選好するのは、とどのつまり音楽が内面の感情を直接的に喚起してくれるだけでなく、それによって自己表現が可能となるからだ、と言えよう。自閉症児らは、特に自己の内面性の表現に強い制限と拘束があるだけに、音楽のもつ特性は、彼等の自己実現にマッチしているということになるのではないだろうか。それ故、彼等は音楽が大変好きなのであろう。

7．おわりに

自閉症児が音を嫌い、音楽を好きであるということは、経験上は知っていても、それが何故なのかとなると、その回答は容易でない。しかし、これまでその疑問に応えた論文は殆どない。人は音の世界と隔別するのが極めて困難であるだけに、それが今まで不問にされてきたのが理解できない。

今回、筆者はたまたま自閉症研究大会での一つのハプニングを契機にして、この問題を追究する機会を得た。調査してみると、自閉症児がカナーによって発見された当時から、自閉症児らは音や音楽に対して特異な行動を取っていることが、報告されている。従って、この問題は彼等特有の基本的な問題であり、重要だといえる。

今後、多くの研究者がこの問題を取り上げて、その関係性を明らかにしてくれることを希望したい。筆者としても、資料を整え、さらなる研究をしてみたいと考えている。

参考文献

1）L. カナー著、十亀史郎、斉藤聡明、岩本憲訳、幼児自閉症の研究、黎明社、昭和53年、pp10～55

2）同上書、p.48

3）Temple Grandin, thinking in pictures, doubleday, 1995, pp.67＝72

4）ドナ・ウイリアムズ著、河野万里子
自閉症だったわたしへ、新潮社、1993、pp.72、（他音に関する箇所の引用）

5）Temple Grandin, An Inside View of Autism, High Functing Indivisuals with Autism edited by Erich Schopler and Gary B. Mesibov, Plenum, 1992, pp.106 ～108

6）カール・デラカート著、阿部秀雄訳、さいはての異邦人、いま自閉の謎を解く、風媒社、1982、pp.134～174.

7）Lorna Wing, Theconttinuum characteristics, Diagnosis and assessment in Autism edited by Erich Schopler and Gary B. Mesibov. Plenum, 1988, p.89.

8）　ドナ・ウイリアムズ著、同掲書

9）　Gail Gillingham, Autism, handle with care, Future Horizons, 1995

10）　山松質文著、自閉児の治療教育―音楽療法と箱庭療法―、岩崎学術出版社、1978